

白衣のフローラ  
Judith Farr: *The Gardens of Emily Dickinson*

星野 勝利

花巻市郊外の胡四王山に「ポランの広場」と名付けられた庭園がある。山頂の宮沢賢治記念館のふもとにあるこの庭園には、賢治が設計した南斜花壇と日時計花壇が造られている。農学を学んだ賢治が、農学以外の多様な世界に旺盛な関心を示したことは、山頂の記念館の展示方法にも現れている。ここでは、詩人や童話作家として知られる賢治の世界が、環境、信仰、科学、芸術、総合、資料、農村という7部門に分けて展示されている。

さまざまな世界に関心を示した賢治が、花や庭園にも強い関心を示していたことは、残された手帳やノートに認められる。庭園としての「ポランの広場」は、賢治が残した『MEMO FROLA 手帳』および『「MEMO FROLA」ノート』に記載されたメモに基づくものである。このメモには、学名やカタカナ表記で記されたかなりの数の植物や花の名前と共に、自筆の挿絵や設計図などがこまめに書き込まれている。

賢治のこのような関心のありかは、詩にも反映する。7月のイーハトーブの緑の世界を、詩人賢治は次のように眺める。「はんのき」「萱」「よし」「アイリス」「アザミ」「月見草」。賢治の眼は、7月のまぶしい光の中で生きる花や草木の世界に鋭く注がれる。

はんのきと萱の群落  
さはやかによしは刈られて  
今年も燃えるアイリスの花  
またわづかにひかる あざみの花  
幾重の山なみに雲たゝなびき  
月見草の花弁萎む

— 「詩ノート」 (「栗の木花さき」)

賢治と同じように、花や草木や庭園に強い関心を示した詩人が、19世紀アメリカにもいた。アメリカ東部マサチューセッツ州の田舎町アマーストの名家に生ま

れた女性詩人 Emily Dickinson (1830-86)である。賢治が花巻に生まれる 10 年ほど前の 1886 年、55 歳で生涯を閉じたこの詩人は、ニューイングランドの面影を色濃く残すこの小さな町で、人生のほとんどを過ごした。生涯独身のまま、ひっそりと一生を送ったこの女性が生前に発表した詩は、わずかに 7 編でしかなかった。しかし、未発表のまま残された約 1800 編におよぶ彼女の詩は、現在ではアメリカの詩や文学を代表するものとなっている。

彼女の詩には、当時の他の詩人とは異なる際だった特長がいくつかある。ダッシュ表記の多用、大文字名詞の頻用、非文法表記、不規則な韻律、難解な比喻などである。もうひとつの顕著な特長といえるもの、それが花や草木への強い関心である。自分の家の庭園でこれらと親しく接していた Dickinson は、詩の中でもこれに頻繁に言及する。自家の庭園で四季折々眼を楽しませてくれる花や植物は、彼女にとっては、さながら親しい知人、友人、あるいは身内のような存在ではなかったかと思われる。

19 世紀半ばのアメリカでは、「自然」や「荒野」が、現在よりも遙かに身近なものとして存在していた。当時の代表的文化人としてのエマソンやソーローは、このことについて実に多くのことばを記している。このような風潮の延長線上にガーデニングの流行がある。当時のニューイングランドでは、特に上流階級では、ガーデニングが一つのたしなみとされていた。アマーストの片田舎の“Homestead”と呼ばれた Dickinson の家にも庭園があった。母や妹とともに幼いときからこれと親しんだ Dickinson は、この庭園を“my Puritan Garden” (p. 3) とよび、やがて自分で造った花束を、知人や友人に、折に触れて贈ることになる。生前の Dickinson は、おそらく詩人としてよりも、むしろガーデナーとして知られていたかもしれない。ちょうど賢治が、詩人としてよりも、むしろ農業の関係者として知られていたように。

本書は、詩人 Dickinson のこのような側面に光を当ててくれる。ガーデナーとしての詩人、花や草木と親しく触れあう詩人—これを描き出すことが本書のねらいである。具体的には、“a picture of her horticultural tastes and interests with an indication of their broad extent and application” (Preface)を明らかにすることである。このために著者は、Introduction と Epilogue のほかに、次の 5 つの視点を用意する。これが本書の章立てである。

- (1) Gardening in Eden
- (2) The Woodland Garden

- (3) The Enclosed Garden
- (4) The “Garden in the Brain”
- (5) Gardening with Emily Dickinson

巻末の Appendix には、Dickinson が実際に育てていた花がアルファベット順にリスト・アップされている。これによると Dickinson は、Amaryllis, Anemone, Arbutus, Aster から Trillium, Verbena, Violet, Zinnia など、約 70 種の花を育てていた。彼女が花を好んだのは、家庭の影響、特にバラを好んだ母親の影響もあったが、彼女が通った女学校 (Amherst Academy および Mary Lion's Female Seminary (後の Mount Holyoke College)) での学習の影響もあった。当時の女学校では植物学 (botany) や園芸学 (horticulture) が女学生のたしなみとして好まれ、カリキュラムにも含まれていた。Dickinson はこれに強い関心を示し、進んで植物標本集 (herbarium) も作製していた。特に好んだのは野の花 (wildflowers)—とりわけ“the Indian pipe, violet, gentian, fritillaria, anemone, orchis, and lady's slipper” (p.31) などがお気に入りであった。

Dickinson は自分の家の庭園を“a little bit of Eden” (p.13) と呼んだという。このエデンの園で彼女はさまざまな花と親しむ。.... rose, hyacinth, heliotrope, buttercup, daffodil, tulip, geranium, pansy, sweet-pea, dahlia, daisy, jasmine, crown imperial, dandelion, wood lily, daylily, Calla lily.... じつに多様である。第 1 章 (Gardening in Eden) は、2 エーカーの広さを持つこの庭園と詩人との関係、とくに身内や知人—父 Edward, 母 Emily, 兄 Austin, 義姉 Susan, 妹 Lavinia, 恋愛関係が指摘される Samuel Lord や Otis Lord—などとの関係が紹介される。これらの人間関係を取り持つ媒介物となった贈り物としての花、その贈り物として Dickinson が好んだ花、その花と花ことばとの関係、花への関心と自らの眼疾との関係、絵画との関係、とりわけ植物学やガーデニングに凝っていたハドソンリバー派 (The Hudson River painters) の画家 Thomas Cole などとの関係、ラファエル前派の絵 (Pre-Raphaelite painting) に現れるキスゲの花 (daylily) の象徴性との関係—序章にして早くも、めくるめく花の世界が広がる。

以下、第 2 章 (The Woodland Garden) では、野の花との関係がさらに詳しく紹介される。棺の中に横たわる姉 Dickinson に対して、妹 Lavinia は、heliotrope, lady's slipper, blue violet の三種の花を手向けたという。いずれもアマースト近郊の山野でどこでも見られるような野の花である。よく知られた Dickinson の銀板写真 (ダゲレオタイプ) で彼女が手にしているのは pansy

(heartsease)であるという (p.82)。このことと当時の女性肖像画の一般的構図(背景は豪華な花園)との関係、野の花こそ最高の題材とした Ruskin の絵画観との関係、Wordsworth, Tennyson, Emerson などの詩との関係、当時の上流階級の貴族趣味と Dickinson の野の花好みとの関係。あるいは Dickinson の好みについての一部フェミニスト研究者の意地悪な見方 (“Dickinson left the heavier physical work in the garden to the hired man and to her sister, Lavinia, while she focused her energies on the ‘luxury of apprehension’”(p.123))。可憐で清楚な身近な野の花が、詩人 Dickinson の人となりを知るための必須のアイテムであることを、この章は雄弁に教えてくれる。

第3章 (The Enclosed Garden) では、詩人と庭園との関係が掘り下げられる。詩人 Dickinson にとって2エーカーの庭園は、野の花が咲き乱れる閉じられた空間であった。と同時に、遙か南方の世界とも連なる開かれた空間でもあった。夏の庭園の木陰でくつろぐ女性を描く Winslow Homer の絵 *The Butterfly* (p.144) では、南方から来た渡りの蝶とおぼしきものが一匹、女性の腕に止まっている。南方の異郷の世界と花園で涼む一人の女性を結ぶ蝶—この構図は Dickinson の詩の中にも現れる (“...Butterflies from St Domingo / Cruising round the purple line—/ Have a system of aesthetics—/ Far superior to mine” (p.143))。一方、1853年に描かれた Walter Howell Deverell の絵 *A Pet* (p.163)では、庭園の温室の入り口に掛けられたカゴの鳥に身を寄せる妙齢の女性が描かれる。カゴに幽閉されたこの鳥は、庭園と温室に幽閉されたビクトリア朝中期に生きる女性自身の似姿でもある。幼い頃から庭園を愛した Dickinson は、30歳を過ぎた頃から、ちょうど Indian pipe(アキノギンリョウソウ) (p.16) のような白い服を身にまとい、人との交わりを避け、敷地の中に静かに引きこもって生涯を送った。その Dickinson にとって、生きるための唯一の場所となったのが、自宅の2エーカーの庭園であった。

この独身女性詩人の精神世界はどのようなものであったのか。詩人としての想像力はどのように働いたのか。第4章 (The “Garden in the Brain”) では、このことが追跡される。Winslow Homer のもう一つの絵 *At the Window* (p.205)では、野の花を手にして窓辺の椅子に腰を下ろした少女が、出窓に置かれた紅白2種類のゼラニウム越しに緑の庭園を眺めている。花園を眺めるこの少女は、庭園を眺める詩人 Dickinson に他ならない。観察者としての少女の精神世界は、たとえば次のリンドウの詩に示される。バラになれないリンドウ、それでも寒さの中で見事な紫色を身につけていくリンドウに、はたして自分はなれるのか。創造者への

直截な問いかけは、詩人自身の悲痛な問いでもある。

God made a little Gentian—  
It tried—to be a Rose—  
And failed—and all the Summer laughed—  
But just before the Snows

There rose a Purple Creature—  
That ravished all the Hill—  
And summer hid her forehead—  
And Mockery—was still—

The Frost were her condition—  
The Tyrian would not come  
Until the North—invoke it—  
Creator—Shall I—bloom?

(p.187)

川の向こう岸に咲く紫の花。その花を採るために、大胆に川を跳び越えていく友達。越えることができずに一人たたずむ臆病な少女。次の詩が示すこの少女の姿も、Dickinson の在りし日の姿であり、生涯の姿でもあった。

I do remember when a Child  
With bolder Playmates straying  
To where a Brook that seemed a Sea  
Withheld us by it's roaring  
From just a Purple Flower beyond  
Until constrained to clutch it  
If Doom itself were the result,  
The boldest leaped, and clutched it—

(p.209)

豊富な挿絵と共にこれらのことを教えてくれる本書は、更なる贈り物を用意している。第5章 (Gardening with Emily Dickinson) は Dickinson が実際に育て

ていた花の具体的な育て方である。本書を通して野の花を初めとする草花に興味を持った読者は、この章を手がかりに、Dickinson の花を自ら育てることを通して直接楽しむことができる。ありがたいプレゼントである。

Dickinson の詩には四季の変化を歌ったものが多い。それも花を通して歌ったものが多い。Epilogue (The Gardener in Her Seasons) は、これについての充実した紹介となっている。たとえば、四季折々の世界は、Dickinson の眼には、花や植物の世界と重なり合って、次のように映る。

The Frost of Death was on the Pane—  
 “Secure your Flower,” said he.  
 Like Sailors fighting with a Leak  
 We fought Mortality— (p.265)

White as an Indian Pipe  
 Red as a Cardinal Flower  
 Fabulous as a Moon at Noon  
 February hour— (p.271)

My Garden—like the Beach—  
 Denotes there be— a Sea—  
 That’s Summer— (p.280)

The name —of it—is ‘Autumn’—  
 The hue—of it—is Blood—  
 An Artery—upon the Hill—  
 A Vein—along the Road— (p.287)

著者によれば、詩人 Dickinson は、花の生誕と死と復活の循環の中に、永遠の生を約束する希望と象徴の証を見たという(“In the cycle of her flowers’ birth, death, and resurrection, she found hope and symbolic proof of the promise of eternal life”(p.296))。17 世紀イギリス形而上詩人との類似性が指摘される彼女の詩は (p.204)、しばしばきわめて難解である。しかし、多くの挿絵や情報がふんだんに盛り込まれた本書は、ニューイングランドの片田舎で生涯を閉じたこの詩

人の内面世界のありようを、新たな角度から映し出してくれる。詩人と花との豊かで深い交わり。難解さを指摘される彼女の詩も、花の角度から眺めると、一段と親しさが増し、わかりやすくなることは確かである。

(Harvard University Press, 2004, xv+350pp.)

(岩手大学教育学部英語教育講座)